

鳩摩羅什の没年問題の再検討

齊藤達也

はじめに

鳩摩羅什は五世紀初めに中国において多くの仏典を漢訳し、仏教史上大きな業績を残した。そのため羅什の生涯や訳経に関する記録が少なからず存在している。しかし、これらの記録には伝説的要素も含まれ、また相互に矛盾する内容を持つものが並存しているため、羅什の生涯について不明な点も多い。特にその没年については、羅什訳仏典の訳出事情にかかわることでもありながら、諸説あって未だに定説はない。

筆者は現在、羅什の伝記・関連研究の文献目録を作成中であり、それらの文献を調べてきた。ところがこの没年問題については、どの先行研究も完全に満足のいく論証・結論を出し得ていないように思えた。そこで先行研究の成果を参照し補いながら改めて関連記録を考察した結果、筆者は羅什の没年を弘始一三（西暦四一一）年頃と推定するに到った。本稿の目的は、羅什の没年問題を再検討しこの新たな説を提示することにある。

第一章 羅什の没年に関する諸説

羅什の没年については表一のようにいくつかの説がある。

表一 羅什の没年諸説

弘始七(四〇五)年説	吉蔵『百論疏』(上ノ上)・同『唯摩經義疏』五
弘始八(四〇六)年説	吉蔵『法華遊意』 慧皎『高僧伝』二・能令一九三九・Tsukamoto 1954・塚本：活動年代一九五四・塚本：肇論一九五五・浅田一九五九・横超／諏訪一九八二・鎌田一九八三、 など
弘始一一(四〇九)年説	など
弘始一五(四一三)年説	「鳩摩羅什法師誄」・円照『貞元録』六・羽溪一九一〇・Bagchi 1927・Nobel 1927・境野一九三五・西修一九三六・湯一九三八・上原一九四九・松山一九五三・Robinson 1967・Liebenthal 1968・陳一九八二・任一九八五・鄭一九八八、 など
その他	
義熙(四〇五―一八)中	僧祐『出三藏記集』一四
弘始一三年説?	横超一九六九 ⁽¹⁾
弘始年中	智昇『開元録』四 ※没年を弘始一一年より後とする

※本稿では以下、羅什の弘始一一(西曆四〇九)年死没説を(四〇九年説)と略記する。他の没年の説も同じ方式で略記す

る。

表の中の〈四〇五・四〇六年説〉は吉蔵が主張しているが根拠は示していない。この説は羅什の訳経の記録上反証が多く、吉蔵の後、伝統的に誤りとみなされている⁽²⁾。筆者も同意見なので、以下本稿でも考慮の対象外とする。

諸説の内、特に重要なのが〈四〇九年説〉と〈四一三年説〉である。

現存文献の中で最も早く〈四〇九年説〉を主張しているのは『梁高僧伝』の羅什伝である。その後この説を踏襲するものはあったが、この史料のわくを越えて説の妥当性を論証しようとした研究は長い間なかったようである。近代以降最初に、関連諸史料を批判的に検討した上で〈四〇九年説〉を公表したのは能令実円氏である（表一の能令氏論文）。筆者の考えでは、能令氏による〈四一三年説〉の難点の指摘は納得のいく点が多く、〈四一三年説〉批判として画期的なものである⁽³⁾。その後塚本善隆氏も三論文（表一）で諸史料を考察し〈四〇九年説〉を主張した⁽⁴⁾。塚本氏の研究以降、日本では〈四〇九年説〉が有力である。

一方〈四一三年説〉は、僧肇作とされる「鳩摩羅什法師誄」による主張で、現存文献の中では円照『貞元録』が最も早く主張している。過去この説をとる研究者は多く、中国や欧米では、塚本氏の研究が周知となった後でも、こちらの方が優勢である⁽⁵⁾。

表一に示したとおり、両説のどちらかをとる研究は枚挙にいとまないが、どちらにしても筆者は今までの研究に問題を感じる。それは、自説に有利な史料の提示や考察は十分だが、不利な史料の方は不十分という傾向がかなり見られるからである。しかし問題はそれだけではない。羅什の没年に関する史料は、没年の提示やその考察を意図した類のもの（以後「没年」言及史料と呼ぶ）と、そうでないもの（以後「没年」関係史料と呼ぶ）

の二つに大きく分けられるが、そもそも前者の史料の示す没年(弘始七・八・一一・一五年)のどれかが絶対正しいと言い切れるのであろうか。そして後者の史料による知見も一旦、既存の没年説にとらわれずに見直してみべきではないか。先行研究はこうした問題意識に十分に答えているとは思えないのである。

以上の問題点を念頭に置きながら、第二章では「没年言及史料」、第三章では、「没年関係史料」を考察する。

第二章 没年言及史料

以下、〈四〇九年説〉と〈四一三年説〉の基本史料である『梁高僧伝』羅什伝と「鳩摩羅什法師誄」を考察する。他にも「言及史料」はあるが、皆、上述二史料を基本典拠にしていたり、それ以上の詳しい情報を含まなかったりなので、本稿では取り上げない。

『梁高僧伝』二、羅什伝の問題の箇所は次のとおり。

然什死年月、諸記不同。或云弘始七年、或云八年、或云十一年。尋七与十一、字或訛誤、而訳経録伝中、猶有十一年者。恐雷同三家、無以正焉。

この部分には版本により字句の違いがある。⁽⁶⁾ 字句が引用の通りなら、慧皎が〈四〇九年説〉を選んだのは一つには、訳経録の中に弘始一年とするものがあつたからのものである。しかし慧皎の〈四〇九年説〉の直接の典拠や理由はそれ以上わからない。この記録自体には信憑性を確かめる手がかりは含まれず、真偽を決定するには他の史料に依存するほかない。

さて次は「鳩摩羅什法師誄」⁽⁷⁾(以下「誄」と略称)である。誄は、死者の功績をたたえ哀悼の意を表するため⁽⁸⁾の文章である。上述「誄」について論ずべき問題は多いが、論議が繁雑になるのを避けるためここでは「誄」の

眞贋問題を中心に論ずるのみとする。

「誄」には「癸丑之年、年七十、四月十三日薨于大寺。」と没年が明示されている。弘始年中の「癸丑」は一五年なので、これが〈四一三年説〉の根拠となっている。⁽⁹⁾ 作者は伝統的に羅什の直弟子の僧肇とされているため、〈四一三年説〉をとる者はこの没年の信憑性が高いと考えている。しかし「誄」は、慧皎や吉蔵、『歴代三宝記』の費長房や『開元録』の智昇らがいずれも参照した形跡がないので、〈四〇九年説〉を取る者はこれを後世の偽作と考えている。⁽¹⁰⁾ このような問題を含みながらも、「誄」は内容自体の検証によって眞贋が論じられることはほとんどなかった。⁽¹¹⁾ 筆者は、内容から見て「誄」は僧肇作ではなく偽作と考えるので、以下その理由を示そう。

「誄」には羅什の中国招致について次の一節がある。

故大秦符・姚二天王師旅以延之。斯二王也、心遊大覺之門、形鎮万化之上。外揚羲和之風、内盛弘法之術。

道契神交、屈為形授。公以宗匠不重則其道不尊、故蘊懷神宝、感而後動。

(それ故、大秦国の符氏と姚氏の二人の天王は、軍隊をさし向けてお迎えすることとなった。この二人の天王は偉大な覚者(仏)の門に心を遊ばせつつ、万象が変化する世俗の支配者として、外に向かつては羲和にもたぐうべき風教を宣揚し、内にたいしては仏法弘布の方途を盛大にしていたが、眞理はぴたりと一致して心は通い、お招きした上でじきじきの伝授を願ったのである。公は宗匠がどっしりとしていなければ眞理は尊ばれぬと考えられ、かくて神秘の宝を胸に秘め、求めに応じておもむかれた。⁽¹²⁾)

現存の羅什の伝記から考えると、このような一節が羅什の誄にあっても一見不思議はないが、本当に後秦治下の僧肇が書いたとすると大分おかしい。

他の羅什の伝記を考えあわせると、この大秦符・姚二天王は前秦の苻堅と後秦の姚興を指している⁽¹³⁾と見てよい。つまり「誄」では、大秦の名のもとに後秦姚氏と一くくりにして、羅什招致や仏教興隆上の功績が前秦苻堅の事

績としても語られているのである。仏教側から見れば、ここでは羅什と関係して両王が好意的に叙述されていると言える。しかしここで前秦苻氏と後秦姚氏の関係を考えてみる必要がある。

後秦王朝は、前秦王朝が崩壊し姚氏が苻氏を滅ぼすことによって確立した。両氏の間には、苻堅が姚襄(姚興のおじ)を殺し姚襄(姚興の父)が苻堅を殺し姚興が苻登(苻堅の同族)を殺したという凄惨な歴史があり、両王朝は不倶戴天の敵どうしなのである。⁽¹⁴⁾このような歴史を持つ後秦の治下において、前秦・後秦を区別せず苻堅を後秦姚氏と同列に好意的に評価した文章を書くことは、王朝イデオロギー上、公的にははばかれることである。権力から遠い一般庶民ならまだしも、後秦王朝の手厚い保護を受ける仏教教団の僧肇がこうした問題のある文章を敢えて書くとは思えない。

「誄」を偽作と見る理由をもう一つ挙げよう。先の引用部の少し後に次の一節がある。

如彼維摩、跡參城坊。形雖円応、神冲帝郷。来教雖妙、何足以臧。

(かの維摩居士と同じように、暮らすのは町の中。肉体はすべてに円満に應ずるものの、精神は天帝の郷へとたかく舞いあがる。連れの女は器量よしだが、とりたてて言うほどのことは何もないのだ。⁽¹⁵⁾)

「誄」を訳した吉川忠夫氏によれば「来教雖妙、何足以臧」は、羅什の身辺に妓女が仕えていたことに言及しているという。⁽¹⁶⁾妓女の事を「誄」がどう評価しているかは措くとして、僧肇が師の羅什の誄の中でその生涯の汚点にわざわざ触れることはありそうにない。誄や墓誌銘は故人の生前の功績をたたえ哀悼の意を表するための文章であり、故人にとって不名誉なことは普通ことさらに触れたりしないからである。

以上の内容に関する二点からも、「誄」が僧肇や後秦時代の人間の作ではないことは明らかである。偽作者は、前秦・後秦王朝や羅什の生涯をはるか過去のこととしてしか意識し得ない後代の人間であろう。⁽¹⁷⁾

やはり「誄」は由来が不確かで、羅什の伝記文献としての史料価値は高く評価できない。したがって少なく

とも、「誄」が僧肇自身の作であるからそこに明記された死没年月日は信頼しうるといった議論は成り立たなくなつたと言える。〈四一三年説〉も正しさを証明するには、他の「没年関係史料」の中にもっと信頼しうる根拠を求めなければならないのである。

第三章 没年関係史料

本章では「没年関係史料」を考察する。〈四〇九年説〉と〈四一三年説〉で意見がわかれるのは弘始一二（四一〇）年以降の羅什の生存についてなので、本稿で取り上げる史料もこの年以降の事柄に関するものだけとする。

(一)

◎僧肇「答劉遺民書」（『肇論』所収、引用部分は大正四五、一五五頁下）

不面在昔、佇想用勞。慧明道人至、得去年十二月疏并問。披尋返覆、欣若暫對。涼風屆節、頃常如何。貧道勞疾、多不住耳。信南返。不悉。八月十五日。積僧肇疏答。……

由使異典勝僧方遠而至、靈鷲之風、萃於茲土。領公遠舉、乃千載之津梁也。於西域還、得方等經二百余部、請大乘禪師一人・三藏法師一人・毘婆沙法師二人。什法師於大石寺出新至諸經。法藏淵曠、日有異聞。禪師於瓦官寺教習禪道。門徒數百、夙夜匪懈、邕邕蕭蕭、致化欣樂。三藏法師於中寺出律藏。本末精悉、若觀初制。毘婆沙法師於石羊寺出舍利弗阿毘曇胡本。雖未及訳、時問中事、發言新奇。

この書は、僧肇「般若無知論」についての劉遺民の質問に対する僧肇の回答で、当時の羅什とその周辺の動向も書かれており重要な史料である。

引用部からは、この書がある年の八月一五日に書かれ(b)、当時羅什は健在で訳経活動を継続中であつたことがわかる(c)。そして外国出身僧の活動について以下のことも知られる⁽¹⁸⁾。

(d)「禪師(〓仏馱跋陀羅)」が瓦官寺で多くの弟子達に禅道を教授している。

(e)「三蔵法師(〓仏陀耶舎)」が中寺で律蔵を訳出中。

(f)「毘婆沙法師(二人〓曇摩耶舎・曇摩掘多)」が『舍利弗阿毘曇論』訳出(に従事)⁽¹⁹⁾。ただし実際の翻訳には至っていない。

こうした内容から、この書の作成年代がわかればその時の羅什の健在が確認できるのであるが、この書にはその年代が明示されていない。そのため作成年代は古くから数多く論じられており一致した見解はない⁽²⁰⁾。だから改めてその年代を確認する必要がある。そのため、竺道生・劉遺民と前記(e)・(f)の関連記録を次に挙げ、さらにその内容とつきあわせて「答劉遺民書」の作成年代を年表の形で示す。(繁雑になるのを避けるため、(d)の関連史料は史料名と共に表二の中に示すだけとした。長安退出後の仏馱跋陀羅については本章(三)参照。)

◎竺道生の動向(一)

I①去年夏末、始見(竺道)生上人示無知論。(『劉遺民書問附』、『肇論』所収、大正四五、一五五頁上)

I②(道生)遂与始興慧叡・東安慧巖・道場慧觀同往長安、從羅什受學。關中僧衆、咸稱其秀悟。義熙五(四〇

九)年還都、因停京師、……(『出三』一五、竺道生伝)

◎劉遺民の没年(II)

II①劉程之、字仲思、彭城聚里人、漢楚元王之苗裔也。……凡居山(廬山)十有二年。自正月感疾、……至六月

初、果見白毫相、次見仏眞影。……至二十七日、僧衆咸集、遺民曰、今逝矣。予氣尽、勿哭以相惱乱。……

少頃合掌、西向而逝。……即義熙六年庚戌終。春秋五十七。(陳舜俞『廬山記』卷三、劉遺民伝、大正五一、

表二 「答劉遺民書」 関連年表

※点線内は上記書の内容に適合する時期

414 /16 /10	413 /15 /9	412 /14 /8	411 /13 /7	410 /12 /6	409 /11 /5	408 /10 /4	407 /9 /3	西曆 /弘始 /義熙
413 劉遺民生存? (II③)			410 劉遺民没 (II②、II ①は同年6 /27)		409 竺道生、建 康帰着 (I ②)		劉遺民・竺道生	
<p style="text-align: center;">410.8/15 ← -409.12月 ← -408夏</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">僧肇からの返信 (b)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">劉遺民からの書 (a)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">劉遺民、廬山に来た竺道生から『般若無知論』を見せられる (I①)</div> </div> <p style="text-align: center;">411.8/15 ← -410.12月 ← -409夏</p>								
412 經訳出 廬山で某年夏、冬に禅 三、一四、当人伝			長安追放 長安瓦官寺で禅道を教 授 (d)		406 / 408 中国に到着 『華嚴経伝記』一、 『仏祖歴代通載』 七)		仏跋跋陀羅	
412 訳出終了 (III)			訳出中 (e)		410 四分律訳出開 始 (III)		仏陀耶舎	
414 自ら訳出開始 (IV)			訳出せず (f・IV)		408 訳出を命じられる (IV)		曇摩耶舎 曇摩掘多	

鳩摩羅什の没年問題の再検討(齊藤)

一〇三九頁)

II②劉程之、字仲思、彭城人、漢楚元王之後。……即与衆別、臥床上面西合手氣絶。……時義熙六年也。春秋五十九。〔死亡の月日の記載なし〕(『仏祖統記』卷二六、十八賢伝、劉程之の条)

II③廬山遠法師作劉公伝云、劉程之、字仲思、彭城人、漢楚元王裔也。……義熙、公候咸辟命、皆遜辞以免。九年、大尉劉公知其野志冲逸、乃以高尚人望相礼、遂其放心。居山十有二年卒。〔死亡年月日の記載なし〕(元康『肇論疏』卷中所引、劉公伝、大正四五、一八一頁下)

○傍線部 e

III 以弘始十二年、歲在上章掩茂、請罽賓三藏沙門仏陀耶舍出律蔵四分四十卷、十四年訖。(『出三』九、僧肇「長阿含経序」)

○『舍利弗阿毘曇論』の訳出事情(傍線部 f)

VI 以秦弘始九年、命書梵文。至十年、尋応令出。但以経趣微遠、非徒開言所契、苟彼此不相領悟、直委之訳人者、恐津梁之要未尽於善。停至十六年、経師漸閑秦語、令自宣訳。(『出三』一〇、道標「舍利弗阿毘曇序」)

表二でわかるとおり「答劉遺民書」の内容 d・e・f に合うのは四一〇年か四一一年の八月十五日になる。そして先立つ質問書を劉遺民が書いたのはその前年の一二月である(a)。ところで劉遺民は四一〇年六月二十七日に死んだという記録がある(II①)。これによれば、四一〇年一二月に劉遺民は僧肇に手紙を書けないわけで、そうすると「答劉遺民書」は翌年四一一年執筆の可能性がなくなる。しかしII①を含む『廬山記』の史料的价值を疑う意見もあり、また義熙九(四一三)年に劉遺民の生存を示す史料もある(II③傍線部)。通説では劉遺民の没年は四一〇年とされているが、II①・②とII③のどちらが正しいか完全に決定できる史料は他に見当たらないようなので、本当は、その没年を四一〇年で確定済とするのは問題がある。このような理由から、「答劉遺民

書」の作成は四一〇年か四一一年のどちらかの八月一五日であると言うにとどめておきたい。しかしどちらにせよ、四一〇年八月一五日に羅什が健在であったということは言えるのである。

引用史料や表二でわかるように、僧肇「答劉遺民書」は、別系統の関連史料がいくつもあり、それらとの矛盾も特に見られないので、信頼できる没年関係史料と言える。以上により「答劉遺民書」は〈四〇九年説〉の重大な反証であると筆者も考える。

(二)

次は『成実論』訳出に関わる記録である。

大秦弘始十三年、歳次豕韋、九月八日、尚書令姚顛請出此論、至来年九月十五日訖。外国法師拘摩羅耆婆手執胡本、口自伝訳、曇曇筆受。(『出三』一一、「成実論記」、大正五五、七八頁上)

羅什の没年を考える上でこれも重要な史料である。この記述が正しければ、当然羅什は弘始一四(四一二)年九月一五日まで生きていたことになり、〈四〇九年説〉には大變都合が悪い。そのため能令実円氏や塚本善隆氏らは、いくつか理由を挙げてこの史料の信憑性を疑い、その訳出年時の記載を認めていない⁽²¹⁾。一方〈四〇九年説〉に反対の研究者は皆、自説の正しさの重要な証拠としてこの史料を挙げるが、ほとんどがその信憑性を考慮せず、両者の議論は噛み合わぬままになっている。したがって改めて「成実論記」の史料的价值や『成実論』訳出時期を判定する必要がある。

まずは右引用部の「尚書令姚顛」の真偽の問題である。この記述については信憑性を疑う意見があり、それは弘始一三年の尚書令を姚弼とする考えに基づく⁽²³⁾。『晋書』卷一一八姚興載記下には確かに姚顛と姚弼の尚書令在任の記述があるが、姚弼の尚書令就任年月は示されていない。やはり、『晋書』によるかぎり、弘始一三年九月

頃の尚書令を特定することは無理であろう。⁽²⁴⁾したがって、「尚書令姚顛」の真偽の決定は保留せざるを得ず、この部分は「成実論記」の史料的价值の判断材料にしないことにする。

次に訳出時期について見てみる。弘始一三年訳出は「成実論記」の他に、それと同系統と思われる「成実論大義記」(智蔵、西暦四五八―五二二年)にも記載されている。⁽²⁵⁾これらによれば、梁代初めにはすでに弘始一三年訳出が伝えられていたことは確かである。しかし訳出時期には異説がある。「歴代三宝記」卷八(大正四九、七八頁下―七九頁上)には、

成実論二十卷〔割注〕或十六卷。弘始八年出。曇略筆受。見二秦録。此論仏滅後八百余年、訶梨跋摩造。とあり、訳出は弘始八年とされている。

この両説のうち、塚本善隆氏と木村宣彰氏は弘始八年説をとる。⁽²⁶⁾その根拠となるのは次の二史料である。

(姚)興勅住逍遙園、助什訳経。初出成実論、凡諍論問答、皆次第往反。影恨其支離、乃結為五番、竟以呈什。什曰、大善、深得吾意。什後出妙法華経、……〔梁高僧伝〕六、曇影伝)

什所翻経、叡並參正。昔竺法護出正法華経、受决品云、天見人、人見天。什訳経至此、乃言、此語与西域義同、但在言過質。叡曰、将非人天交接、兩得相見。什喜曰、実然。其領悟標出、皆此類也。後出成実論、令叡講之。(同前書同卷、僧叡伝)

前述両氏の考察を参考にしてこの二史料を考えると次のことが言える。『成実論』訳出について、前者の史料は『法華経』より前、後者は『法華経』より後とする。二史料は互いに矛盾しているように見えるが、『成実論』の弘始八年訳出説に有利な記述である。なぜなら『成実論』訳出が『法華経』訳出を挟んであるいは並行して、ほぼ同時期に行われたと考えた場合のみ、二史料がそのまま両立するからである。『法華経』訳出は弘始八(四〇六)年なので(『出三』八「法華宗要序」)、『成実論』訳出を弘始八年とするとうまく合致する。⁽²⁸⁾

一方、訳出を弘始一三年からとする「成実論記」・「成実論大義記」を支持する別種の史料はない。このように、支持する別系統の史料の有無によつて判定すれば、『歴代三寶記』の弘始八年訳出説の方が有利である。したがつて、「成実論記」は重大な反証があり、内容は十分信頼できるとは言えない。決定的な価値を持つ「没年関係史料」として扱ふの無理である。

(三)

弘始一三一―一五年に関する史料としては、次の仏馱跋陀羅（以下、覺賢の名を用いる）の記録が重要である。『出三』一四仏馱跋陀羅伝には、当人が長安仏教教団からの追放を命じられた後のこととして次のような記事がある。

A 乃与弟子慧觀等四十余人俱発、神志従容、初無異色。……

B 先是廬山积慧遠久服其風、乃遣使入関致書祈請。後聞其被斥、乃致書与姚主解其擯事、欲迎出禅法。頃之、

仏賢（＝仏馱跋陀羅）至廬山、遠公相見欣然、傾蓋若旧。自夏迄冬、訳出禅数諸経。

C 仏賢志在遊化、居無求安。以義熙八年、遂適荊州。……

D 時陳郡袁豹為宋武帝太尉長史、在荊州。仏賢将弟子慧觀詣豹乞食。……既而（豹）問慧觀曰、此沙門何如人。

觀答曰、德量高邈、非凡人所測。豹深歎異、以啓太尉。太尉請与相見、甚崇敬之、資供備至。俄而太尉還都、請与俱帰、安止道場寺。

また『梁高僧伝』二の仏馱跋陀羅伝には前掲C・Dに対応する以下の記述がある。

C 賢志在遊化、居無求安、停止歲許、復西適江陵。

D 時陳郡袁豹為宋武帝太尉長史、宋武南討劉毅、随府届于江陵。賢将弟子慧觀詣豹乞食、……

以上の史料によると、長安から追放された覚賢は弟子の慧観らと共に廬山に向かった。そしてそこで慧遠に歓迎され一年ほど滞在した(以上A・B・C)。そしてその間の夏から冬にかけて禅経を訳出した(B)。その後覚賢は義熙八(四一二)年に廬山から荊州(江陵)に向かった(C)。荊州には、劉毅討伐のため劉裕(後の宋武帝)と部下の袁豹が来ており(D)、覚賢は慧観と共に袁豹のところに行って行乞し、それがきっかけで劉裕にも手厚くもてなされ、劉裕の帰還に伴って建康に至った(D)。

Dにある劉裕の劉毅討伐は『宋書』卷二武帝紀中にも記録され、それによると劉裕は義熙八(四一二)年一月に荊州に到着し、翌年二月に建康に戻ったことがわかる²⁹。したがって覚賢と袁豹・劉裕との交渉は四二二年末から四一三年初めということになる。

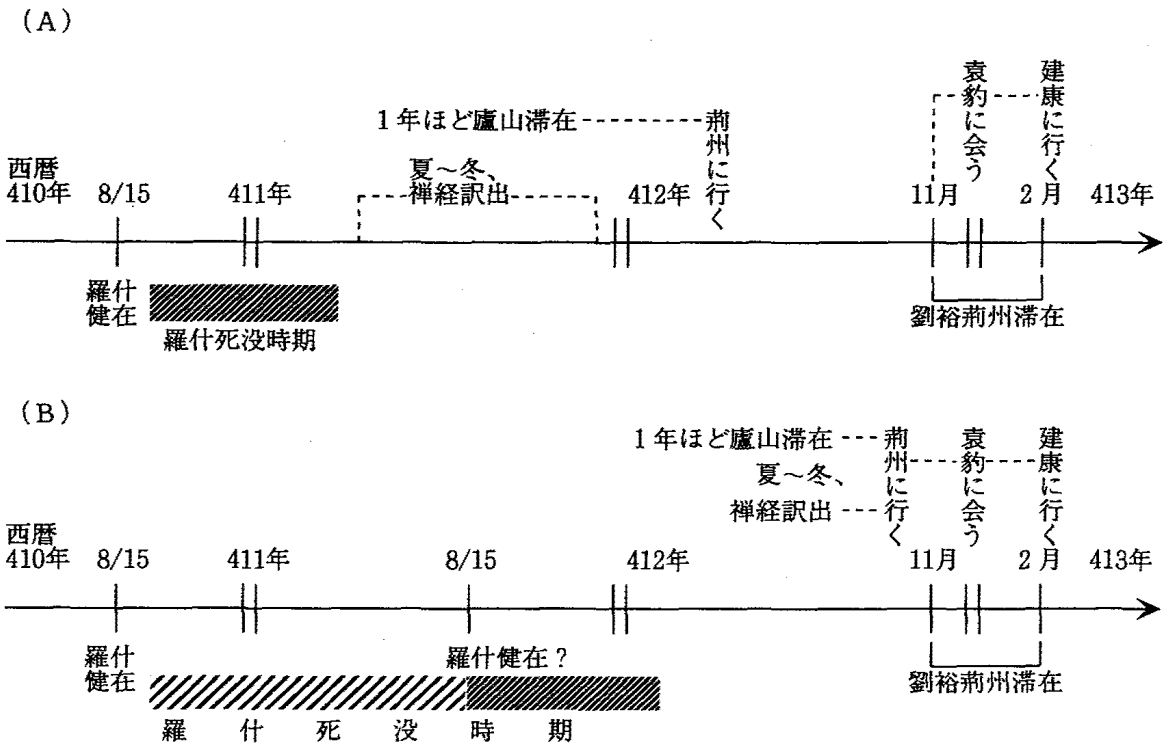
さらにD・Dによると覚賢が荊州に行く時慧観が同行していたことがわかる。『梁高僧伝』七には慧観伝があり、その中で当人が羅什の下で「法華宗要序」を書いたことが述べられた後、次の一節が続く。

E 什曰、善男子所論甚快、君小却当南遊江漢之間、善以弘通為務。什亡後、迺南適荊州。

この中で慧観の荊州行きは「南適」と表現されているので、それまで当人のいた、北方の長安が荊州行きの起点として考えられているはずである。だから、「什亡後」というのは長安からの出発時を含むと解釈してよい。細かい解釈を試ればこのようになるが、ともかくEからは、慧観が南下して荊州に行ったのが羅什の死没後であったことがわかる。

このEと先のA以下を考えあわせると、慧観が覚賢と共に荊州で袁豹に会ったのは四二二年末から四一三年初めの間であり、その時にはすでに羅什は死没していたことになる。そうすると「誄」による羅什死没の日(四一三年四月十三日)は否定される。以上の考え方は能令実円氏や塚本善隆氏の説によったものである³⁰。上掲の史料間には重大な矛盾がなく、管見のかぎり有効な反証もない。そこで筆者も上掲諸史料の信憑性を認め、能令氏ら

図一 覺賢の長安退出後の行動



の説を基本的に正しいと考える。これに対し(四一三年説)の側からは有効な反論はなされていない⁽³¹⁾。

次に、前述の史料を用いて羅什の死没時期をできるだけ限定してみる。

前掲A、Eの史料によって、覺賢の行動は、(羅什死没後)長安退出——廬山に一年ほど滞在(その間の夏から冬に禪經訳出)——荆州に行く(四一二年)——袁豹に会う(四一二年末から四一三年初め)——劉裕と共に建康へ行く(四一三年二月頃)、という順序になる。そして、廬山における夏から冬の禪經訳出が何年なのかを考えると、四一〇年八月一五日までは少なくとも羅什は健在なので(「答劉遺民書」、本章(一)参照)、この年ではなく翌年以降である。そして廬山から荆州へ行くのは四一二年なので、結局可能性があるのは四一一年か四一二年だけということになる(図一参照)⁽³²⁾。もし禪經訳出を四一二年とすると、確かに覺賢の廬山到着後の行動はかなりつまって時間的にきつい感じがするが、(B)に示した通り不可能ではない。また現存史料には、禪經訳出がどちらの年かを決定する決め手はない。そのため覺賢

の各行動の時間的推移は図の(A)・(B)の二通りに解釈できる。

今度は羅什死没のありうる時期を考えると、覺賢の行動が(A)の通りであるなら、廬山での禪經訳出は四一年夏からになり、羅什の死没は四一〇年八月一五日より後、四一年春頃までということになる。一方(B)の通りであるなら、廬山での禪經訳出は四一二年夏からになり、羅什の死没は四一〇年八月一五日より後、四一年春頃までということになる。ただし、もし「答劉遺民書」が四一一年の作であるなら、当年八月一五日までは羅什は健在ということになり、その場合可能なのは(B)だけで、死没の時期は四一一年八月一五日より後、四一二年春頃までということになる。以上の推定では、覺賢が長安から廬山に至るまでの時間や、到着から禪經訳出開始までの時間は考えに入れず、羅什死没の可能性のある時期をかなり広くとつてある。

前述のように羅什の死没時期は条件しだいで何通りが考えられるが、どれにしても四一一年前後の時期におさまるので、死没時期は四一一年頃とすればよいであろう。覺賢・慧観の関連史料と先の「答劉遺民書」は比較的信頼できる「関係史料」であるが、この二つの内容から判断すると羅什の没年は既存の没年説とは異なったものになるのである。

(四)

次に、羅什の長安在住年数に関わる史料を考察する。

『梁高僧伝』六の曇邕伝には次の記述がある。

後為(慧)遠入関、致書羅什、凡為使命、十有余年。

これは、曇邕が師の慧遠から羅什への手紙を送る使いの役割を十余年間はたしてきたことを述べている。これが事実なら当然羅什は長安到着後十余年在住していたことになり、在住九年目に死去したことになる(四〇九年

説は成り立たなくなる。そのため〈四一三年説〉の陳世良氏はこの記述を自説の根拠の一つとして挙げている。⁽³³⁾ところが〈四〇九年説〉の側からは何の反証・反論も提出されていない。曇邕のこの活動に関して他に参照すべき記録が残っていないのでその点は問題であるが、この一節自体には矛盾や不自然な点はなく、反証もないので、その内容を疑う理由は特にない。そのため筆者は上記の記録を考慮に値する史料と考える。では、この史料は〈四一三年説〉に直結する史料かというところではない。確かにその説の通りならば、羅什の死没は長安在住一三年目で、この史料は大變好都合である。しかし「十有余年」というのは最低足かけ一年以上ならよいはずである。そうすると、羅什が四一一年に死去したとしてもやはり羅什の長安在住は「十有余年」と言い得るであろう。このように曇邕伝の記述は羅什の死没を四一一年以降と考えるのに有利な史料である。そして〈四〇九年説〉の反証と言えるが、〈四一三年説〉の決定的証拠とは見なせないのである。

もう一つの史料は僧肇「涅槃無名論」の上表文中の次の一節である。

肇以人微、猥蒙国恩、得閑居学肆、在什公門下十有余載。雖衆經殊致、勝趣非一、然涅槃一義、常以聽習為先。

(わたくし僧肇はとるに足らぬ人間でありながら、みだりに国家の恩恵を蒙り、心静かに身を学問の場に置くことができまして、什公の門下にあること十余年になります。多くの經典は趣きを異にし、そのすぐれた主旨は単一ではありませんが、涅槃の意義については、(その間)常に第一のこととして聞き習っております。)

この中で問題になるのは「在什公門下十有余載」である。僧肇は羅什の涼州時代からの弟子であり、その後羅什が後秦王朝の保護下に長安で活動し死去するまで常に共にあった。⁽³⁴⁾そこでもし「十有余載」を、羅什の下にあった長安での年数と解釈すれば、羅什は四〇一年の長安到着後四一一年頃までは生きていたことになり、〈四〇九

年説」と矛盾する。ところがもしこれを、涼州在住時代の羅什に師事してからの年数と解釈すれば、上述の説との矛盾はなくなる。このように二つの解釈は微妙な問題を含んでいるが、今のところ並存したままである。⁽³⁵⁾

このどちらの解釈も可能ではあるうが、筆者は、長安在住の間とする方がより無理のない解釈と思う。それは、冒頭から「学肆」までの部分の意図は、羅什の門下に十余年あったのも国恩のおかげという謝意を姚興に示すことにある、と見るためである。そうするとこの年数は後秦治下の長安でのことと解釈せざるを得ない。このような理由から上表文の一節も、羅什の死没を四一一年以降とするのに有利な史料と考える。

(五)

「没年関係史料」としては、以上の他に、僧肇「涅槃無名論」の作成事情に関する記録と『梁高僧伝』二の卑摩羅叉伝がある。これらはすでに能令実田氏が考察しており、〈四一三年説〉に不利な史料としている。⁽³⁶⁾ 筆者も賛成であるが、決定的な反証とは思えない。

また他に、宗性抄『名僧伝抄』の原典卷一八抄出部には「義熙九年、有弗若多羅至長安、与童寿共出十誦律。」という記述がある。⁽³⁷⁾ これを信ずれば義熙九(四一三)年に羅什は弗若多羅と共に健在であったことになる。しかし、『十誦律』訳出開始と弗若多羅の死没がずっと前であったことは、『出三』・『梁高僧伝』等の様々な関連記録から確かなので、『名僧伝抄』の記述はとうてい信用できない。

以上の史料は、「没年関係史料」として決定的な価値を持つとは思えないので簡単に触れるだけとした。

おわりに

本稿第二章以下の考察をまず簡単にまとめしておく。

第二章では羅什の「没年言及史料」を取りあげ、主として「誅」が内容から見ても後世の偽作であることを新たに明らかにした。また「誅」や『梁高僧伝』羅什伝の没年の記述は「没年関係史料」に依らなければ正しさを立証できないことも触れておいた。

第三章では「没年関係史料」を取りあげた。そしてこの種の史料の中で信頼できるのは、①「答劉遺民書」、②『梁高僧伝』・『出三』の覺賢・慧観の長安退出後の記述、③『梁高僧伝』曇邕伝の一節、などわずかであることを示した。また①・③は〈四〇九年説〉と矛盾し、②は〈四一三年説〉と矛盾していることも指摘した。つまり、参照すべき「関係史料」を比較的信頼しうるものにしほってみても、やはり既存の没年説はどれも、関係諸史料の一致した支持を得られないことが明らかになったのである。これを今までの研究が見過ごしてきたのは、上述①・②・③を公平に合わせて評価しなかつたためであろう。〈四〇九年説〉と〈四一三年説〉のどちらが正しいかという今までの問題の立て方自体を見直す必要がある。

今度は逆に①・②・③のどれにも矛盾しない没年を考えると、②の考察で示した弘始二三（西暦四一一）年頃となる。この四一一年説を主張しようとするれば、この年を没年とする史料は過去になく、この点は確かに問題である。しかし既存の四つの没年説にしても、各々の基づく現存「言及史料」はどれも後世の作で、直接の由来・典拠のわからぬものばかりである。その点で「言及史料」の史料的价值は「関係史料」と比べて特別高いわけではない。それどころか「関係史料」の中には、上述①のようにどの「言及史料」より古いものさえある。また、「言及史料」だけでは、どの没年が正しいかを判定できず、結局判定の中心的役割をはたすのは「関係史料」なのである。そこで筆者は敢えて「没年関係史料」本位に考え、羅什の死没を弘始二三（四一一）年頃と推定する。そして正確な死没時期の記録は、現存「没年言及史料」の残された六一八世紀にはすでに伝存していなかったと

考える。

以上の結論によれば、六一八世紀の羅什の没年問題の歴史は誤解と矛盾の連続ということになる。しかし現存の没年関連記録の大半が残されたのはこの時期である。これは特に、梁代に『出三』・『梁高僧伝』が書かれ、隋唐時代に多くの仏典目録の編纂と様々な訳経記録の検討が積み重ねられたことによる。だから羅什の没年問題が六一八世紀にしばしば論じられたことは、この時期の僧伝・訳経史の研究の進展を反映する一現象であり、その点に中国仏教史上の意味を認めることができるのではないか。

註

(1) 横超慧日氏は、同書二二頁で羅什の生没年を「(一四二一)」とした上で、「彼(羅什)の卒年については異説があるけれども、弘始十三年(四二一)」といわれている」と述べているが、その根拠は示していない。管見のかぎり横超氏自身の研究の中には他に羅什の没年を論じた箇所はないので、今となつてはその真意はわからない。あるいは何らかの記憶違いによる誤記にすぎないのかもしれない。

(2) 横超・諏訪一九八二、一一五頁。

(3) 能令氏は、羅什の誄を偽作とし、『成実論』を含む弘始二一年以降の訳経の所伝を皆誤りと見なし、『梁高僧伝』等の覚賢・慧観の関連記事を指摘するなど、〈四一三年説〉の難点を一〇点取りあげた。

(4) 塚本氏は、『成実論』の弘始一三年からの訳出の記録と羅什の誄の信憑性を疑い、また『梁高僧伝』等の覚賢・慧観の関連記事などを論拠として〈四一三年説〉を否定した。しかし塚本氏は後年、四一一年以降の羅什の生存の可能性を認めていたふしもある。本稿註二一参照。

(5) 〈四一三年説〉の主要な根拠はみな陳一九八二に挙げられている。またロビンソン氏は塚本氏の説に対する疑問点を挙げてゐる。Robinson 1967, pp. 244-247.

- (6) 「而…十一年」の部分は宋・元・明本による。大正五〇、三三三頁上。
- (7) 大正五二、二六四―二六五頁。本稿の引用文もこれに依る。
- (8) 誄の文体については福井一九七九参照。
- (9) 『貞元録』六(大正五五、八一―二頁中)など、本稿表一参照。
- (10) 本稿表一に〈四〇九年説〉として挙げた諸研究。
- (11) 「誄」の「昔吾一時曾遊仁川」という部分は能令氏が論じたことがある。この一節は「誄」の作者が昔羅什から親しく教授の恩恵を受けたことを比喩的に述べたものである。能令氏は、この「一時」は十数年の意味にはならないので、十数年師事した僧肇ならこのようには書かないとする。能令一九三九②。しかし「一時」の意味は文脈次第で一定ではないので、能令氏の説は確実とは言えない。吉川一九八八・二五七頁はこれを「ある時」と訳している。ただし吉川氏は「誄」の真贋について何も述べていない。
- (12) 訳文は吉川一九八八・二五三頁による。
- (13) 吉川一九八八、三八五頁、参照。
- (14) 姚萇は苻堅に強い敵意を持っており、苻堅の殺害後しばらくしてその死体を掘り出して衣服をはぎとり何度も鞭打つなどの辱しめを与えたことがある。また後秦の群臣達の発言の中で、前秦の殘党はしばしば氏賊・寇賊の蔑称で呼ばれている。『晋書』卷一一六姚萇載記参照。
- (15) 訳文は吉川一九八八・二五六頁による。
- (16) 吉川一九八八、三八六頁、註四六二。
- (17) 偽作の年代・動機については鎌田茂雄氏の推定がある。鎌田一九八三、二二七頁参照。
- (18) 「禪師」|| 仏馱跋陀羅、「三藏法師」|| 仏陀耶舎、「毘婆沙法師」|| 曇摩耶舎・曇摩掘多と解釈すべき点については、

Liebenthal 1968, pp. 90-91 参照。

- (19) 傍線部eの「出」と「訳」を通常どおりまったく同じ意味に解釈すると、文脈が首尾一貫しなくなってしまうので、ここは「毘婆沙法師(達)は石羊寺で舍利弗阿毘曇論の胡本の訳出(事業)に従事しています。まだ(実際に漢)訳文は作成していませんが…」と解釈した。この部分を塚本・肇論一九五五・四四頁は「毘婆沙(論)の法師は石羊寺に於いて舍利弗阿毘曇(論)を訳出してをられ、まだ訳了してをりませんが…」と訳す。平井一九九〇・五七頁の和訳もこれに近い。また Liebenthal 1968, p. 914は、“The teachers of the Vibhāṣā are reading the Śāriputra-abhidharma sūtra from a Sanskrit manuscript in the Stone-sheep Monastery; though the translation has not yet started,…”とある。

(20) 諸説は次の通り。

- ・弘始九年説……元康『肇論疏』
 - ・弘始十一年説……中田一九三六・能令一九三九⑤・塚本…活動年代一九五五、など
 - ・弘始十二年説……Liebenthal 1968・陳一九八二、など
 - ・弘始十三年説……桐谷一九六六
- 蜂屋一九七一・一四四頁は桐谷氏の説を挙げるのみである。なお、桐谷氏や陳世良氏はこの書が〈四〇九年説〉の重大な反証であることを指摘している。

- (21) 能令一九三九④など、本稿表一に〈四〇九年説〉として挙げられた諸研究参照。ただし塚本氏は後に『成実論』訳出について多少考えを変え、「もし高僧伝の弘始十一年羅什歿説をとれば、成実論記の説は成立しないが、もし羅什は弘始十一年からは病臥して般若法華の新訳の時のように、多数の聴者を前にして翻訳宣教の活動はできなくなっていたけれども、病臥のまま側近若干の門下と翻訳をつづけ得たとすれば、成立し得る。しかし成実論記にはなお疑問の存する所があり、必ずしも羅什訳出直後の「出論後記」とは認め難いものである。」(塚本…羅什論②一九六四、三六〇頁)と述べている。

(22) 『開元録』四、『貞元録』六、Robinson 1967, p. 245、陳一九八二・一九頁、をよ。Bagchi 1927, p. 184-185, Nobel 1927, p. 228、上原一九四九・一二三頁は『開元録』の考証を挙げる。羽溪氏は〈四一三年説〉をとったが「成実論記」の史料価値は疑っている。羽溪一九一〇、三九一―四一頁参照。

(23) 能令一九三九②、塚本・肇論一九五五・一六三頁・註二九、横超・諏訪一九八二・一一五頁、鎌田一九八三・二二〇頁。

(24) 菅野一九九九、二二八―二二九頁。姚弼の尚書令就任の記述は、『資治通鑑』卷一一六義熙七（弘始一三）年正月の条と『十六国春秋集補』卷五三後秦録五の弘始一三年の条にもある。これによれば、弘始一三年九月頃姚弼が尚書令であった可能性が高い。しかしこれら両書は『晋書』よりさらに後世の編纂史料であり、その中の就任年月が本当に先行の信頼できる史料に依っているかどうかは確認できない。

(25) 澄禅「三論玄義檢幽集」（弘安三（一二八〇）年撰）卷三所引（大正七〇、四一八頁上）。

(26) Tsukamoto 1954, pp. 576-577. 木村氏は、羅什自身の『成実論』訳出を弘始八年春頃とする。木村一九八五・一七―二三頁。

(27) 実際に羅什が他の仏典と並行して翻訳した事例としては『大智度論』がある。

(28) 反論を挙げておく。Robinson 1967, p. 245 は、羅什の訳経は①『大智度論』（弘始七年二月訳了）の後、本文引用の曇影伝によると②『成実論』・③『法華経』の順序になるとし、①訳了時（弘始七年二月）から③訳了時（弘始八年五月）までの間に、分量のある『成実論』を訳せるだけの十分な時間があつたか疑わしく、曇影伝の記述は信用できないとしている。しかし、本稿本文で述べたように、『成実論』訳出が『法華経』訳出を挟んであるいは並行してのことであれば時間的問題は解消する。

(29) 『宋書』卷二武帝紀中、義熙八一九年の条「（八年）十一月己卯、公（劉裕）至江陵、下書曰、……。九年二月乙丑、公至自江陵。」

- (30) 能令一九三九⑥、塚本・肇論一九五五・一三一一―一三三頁。
- (31) 慧観の荊州行きを羅什没後とするEの記述を湯一九三八・三二六頁は誤りとするが根拠は示していない。またロビンソン氏は、もし慧皎が羅什の死没を四〇九年と考え、慧観の荊州行きがこの年より後であることを知っていれば、当然それを羅什没後のこととして書いてしまうのではないかと言う。Robinson 1967, pp. 245-246. しかしこの想像を裏付ける史料をロビンソン氏は挙げておらず、また次の二点の問題がある。①覚賢・慧観の長安・荊州の行程に関して『梁高僧伝』には年月の記載がまったくなく、慧皎が行程各地点の年月を十分に把握していた保証はない。②慧皎が、羅什伝以外でも〈四〇九年説〉に合うように意図的に記述を統一しようと努力した形跡はない。反対に曇邕伝では〈四〇九年説〉と矛盾する記述を残している(本稿第三章(四)参照)。こうした理由から筆者はロビンソン氏の想像は当たっていないと考える。
- (32) 覚賢の長安退出や廬山到着・滞在を四一年頃とする研究は多い。湯一九三八・三四三頁、能令一九三九⑥、塚本・肇論一九五五・一三二頁、Liebenthal 1968, p. 90、鎌田一九八三・三二九頁、等参照。
- (33) 陳一九八二、一八頁。
- (34) 『梁高僧伝』六、僧肇伝。僧肇については、一九歳で羅什に仕え三一歳で死没したという記述があり(元康『肇論疏』下、大正四五・一九〇頁中)、間接的に羅什の伝記とも関わる。しかしこの年齢を認めて前述僧肇伝の生年をもとに数えると、僧肇は長安在住二年目から羅什に仕えたことになってしまう。やはりこの年齢の記述は羅什関係の史料として疑問であり、本稿では特に取りあげなかった。
- (35) 以下は、長安在住の年数と解釈する。『開元録』四、『貞元録』六、羽溪一九一〇・四二頁。Bagchi 1927, p. 185 Nobel 1927, pp. 228-229 は『開元録』の解釈に依る。一方、塚本・肇論一九五五・一二九頁は涼州時代からの年数とする。Liebenthal 1968, p. 101、平井一九九〇・六九一七〇頁も問題の箇所を訳しているが、訳文からはどちらの解釈をとるのか判断できない。

(36) 能令一九三九⑦。

(37) 『新纂大日本統藏經』七七、三五五頁上。

〔略号〕

大正……………『大正新脩大藏經』

『出三』……………僧祐『出三藏記集』（蘇晋仁・蕭鍊子点校本、中華書局、北京、一九九五年、中国仏教典籍選刊）

『梁高僧伝』……………慧皎『高僧伝』（湯用彤校注本、中華書局、北京、一九九二年、中国仏教典籍選刊）

『開元録』……………智昇『開元釈教録』（『大正新脩大藏經』第五卷所収）

『貞元録』……………円照『貞元新定釈教目録』（『大正新脩大藏經』第五卷所収）

〔引用・参考文献〕

浅田信久

一九五九…『鳩摩羅什の生卒年代推定に関する一考察』（『大谷史学』七、一六一―二〇頁）

荒牧典俊

一九八二…『南朝前半期における教相判釈の成立について』（福永光司編『中国中世の宗教と文化』京都大学人文科学研

究所、京都、一三三九―四一三頁）

上原専祿

一九四九…『鳩摩羅什考』（『一橋論叢』二二―一、一一〇―一四九頁）

横超慧日

一九六九…『鳩摩羅什翻訳時代の法華教学』（横超慧日編『法華思想』平楽寺書店、京都、二二四―二三三頁）

鳩摩羅什の没年問題の再検討（斉藤）

横超慧日・諏訪義純

一九八二：『羅什』（大蔵出版、東京、人物中国の仏教）

鎌田茂雄

一九八三：『中国仏教史 第二卷』（東京大学出版会、東京）

菅野龍清

一九九九：『姚氏と仏教』（『大崎学報』一五五、二〇九―二三三頁）

木村宣彰

一九八五：『鳩摩羅什の訳経―主要経論の翻訳とその草稿訳について―』（『大谷大学研究年報』三八、五九―一三五頁）

桐谷征一

一九六六：『肇論「答劉遺民書」の成立時期について』（『印度学仏教学研究』一五一、一八〇―一八一頁）

境野黄洋

一九三五：『支那仏教精史』（境野黄洋博士遺稿刊行会、東京）

任繼愈

一九八五：『中国仏教史 第二卷』（中国社会科学出版社、北京）

西修

一九三六：『羅什研究』（『海潮音』一七、四九―六三・一六五―一七九・三二九―三四〇頁。再録：張曼濤主編『中国

仏教史論集四 漢魏兩晋南北朝篇下』大乘文化出版社、台北、一九七八年、一二七―二〇一頁、現代仏教学

術叢刊一三）

陳世良

一九八二：『鳩摩羅什年表考略』（新疆龜茲石窟研究所編『龜茲仏教文化論集』新疆美術攝影出版社、烏魯木齊、一九九

三年、一五―三八頁所収。初出（未見）：『新疆社会科学研究』一九八二年第一期）

塚本善隆

活動年代一九五五：『鳩摩羅什の活動年代について』（『印度学仏教学研究』三二―二、二三四―二二六頁）

肇論一九五五：『仏教史上における肇論の意義』（塚本善隆編『肇論研究』法蔵館、京都、一一三―一六六頁）

羅什論②一九六四：『鳩摩羅什論―その仏教の江南拡大を中心にして（二）―』（千潟博士古希記念会『千潟博士古希記

念論文集』、東京、三五三―三七〇頁）

鄭郁卿

一九八八：『鳩摩羅什研究』（文津出版社、台北、文津仏学叢書一四）

湯用彤

一九三八：『漢魏両晋南北朝仏教史』（商務印書館、長沙、仏学叢書）

中田源次郎

一九三六：『肇論及びその註疏に就いて』（『東方学報』（東京）六、三五五―四〇六頁）

能令実円

一九三九①⑧：『羅什三蔵の寂年及世寿を論ず（一―八）』（『文化時報』三月四・五・七―一二日号）

羽溪了諦

一九一〇：『鳩摩羅什の研究』（『藝文』一一九、三七―六〇頁）

蜂屋邦夫

一九七一：『僧肇の般若無知論及び劉遺民との問答について 上』（『比較文化研究』一一、一〇五―一四七頁）

平井俊榮

一九九〇：『大乘仏典へ中国・日本篇 二』肇論・三論玄義』（中央公論社、東京）

鳩摩羅什の没年問題の再検討（齊藤）

福井佳夫

一九七九：「六朝文体論―誄について―」(『中国中世文学研究』一四、一一―二二頁)

松山善昭

一九五三：「羅什の入寂年代をめぐって」(『印度学仏教学研究』二一一、一四九―一五〇頁)

吉川忠夫

一九八八：『大乘仏典〈中国・日本篇 四〉弘明集・広弘明集』(中央公論社、東京)

Bagchi, Prabodh Chandra

1927: "1) Kumārajīva", *Le canon bouddhique en Chine; Les traducteurs et les traductions*, T. 1, Paul

Geuthner, Paris, pp. 178-200. (Sino-Indica T. 1)

Liebenthal, Walter

1968: *Chao Lun : the treatises of Seng-chao*, Hong Kong University Press, Hong Kong.

Nobel, Johannes

1927: "Kumārajīva", *Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften, philosophisch-historische Klasse*, pp. 206-233.

Robinson, Richard H.

1967: *Early Mādhyamika in India and China*, University of Wisconsin Press, Madison.

Tsukamoto, Zenryu

1954: "The dates of Kumārajīva 鳩摩羅什 and Seng-chao 僧肇 re-examined", *Silver jubilee volume of the Zimbu-Kagaku-Kenkyusyo Kyoto University*, Kyoto, pp. 568-584.

〔補記〕 本稿執筆に当たり鎌田茂雄教授・末木康弘氏（本学附属図書館）から貴重な御教示を賜わった。ここに記して感謝の意を表します。

Summary

The Date of Kumārajīva's death: A Reexamination

Tatuya Saitō

Kumārajīva (鳩摩羅什), a very important translator of Buddhist sutras into Chinese, is said to have died in 409 or 413 A.D. but the exact date of his death has not yet been fixed. In this article, the author reexamines the records concerning Kumārajīva's life and attempts a solution of this problem.

In the first chapter, previous studies of the date are outlined.

In the second chapter, the author examines "The Eulogy of Kumārajīva" (鳩摩羅什法師誄), especially focusing on the passage in it admiring the two kings of Former and Later Chin (前秦・後秦). It is demonstrated that the "Eulogy" is a forgery and that it was written by neither Seng-chao (僧肇) nor anybody else under the Later Chin dynasty.

In the third chapter, other materials concerning Kumārajīva's life are examined. Among them, only the three records mentioned below turn out to be reliable:

- (1) Seng-chao's reply to Liu Yi-min (答劉遺民書), which shows that Kumārajīva was still alive on August 15, 410.
- (2) The biographies of Buddhahadra (仏馱跋陀羅) and Hui-guan (慧觀) in *Chu san zang ji ji* (出三藏記集) and *Liang gao seng zhuan* (梁高僧傳), whose descriptions of their fleeing to Lu-shan (廬山) and Jing-zhou (荊州) indicate that Kumārajīva had died in early 412 at the latest.
- (3) The biography of Tan-yong (曇邕) in *Liang gao seng zhuan*, which shows that Kumārajīva lived in Chang-an (長安) for over ten years.

Judging from these records, Kumārajīva died ca.411 (=弘始13年), though the exact date of his death did not come down to the Liang (梁) period and afterwards.

『国際仏教学大学院大学研究紀要』第3号 正誤表
Journal of the International College for Advanced Buddhist Studies, Vol. III. Errata.

	(誤)	(正)
130 頁 10 行目	神冲	神冲
130 頁 13 行目	支えていた	仕えていた
134 頁 14 行目	六月二十四	六月二十七
141 頁 2 行目	提出されいていない	提出されていない
154 頁英文要旨 本文 1 行目	KumārAjīva	Kumārajīva
同 24 行目	Kumarajiva	Kumārajīva
同 26 行目以降		(各行頭をアゲル)